

森林・農業班 B

ラオス北部山岳部におけるアカの生業構造と農耕

横山 智 (熊本大学文学部)

キーワード：アカ, 生業構造変化, 農耕, 村落移転

調査期間・場所：2003 年 9 月 10 - 21 日・ポンサリー県コア郡

Occupation Structure and Agriculture of Akha in the Mountainous Area of Northern Laos

Satoshi YOKOYAMA (Faculty of Letters, Kumamoto University)

Keywords: Akha, occupation structure change, Agriculture, settlement relocation

Research Period and Site: September 10-21, 2003, Khoa district, Phongsaly prov.

1. はじめに

ラオスには、Chazée [1999] が示すように 60 以上の民族がモザイク状に分布している。ラオスの民族は、居住する標高によって「低地ラオ」、「中地ラオ」、「高地ラオ」といった便宜上の分類法が一般的に浸透している。それぞれの分類は「低地ラオ」がタイーカダイ (Tai-Kadai) 系言語族、「中地ラオ」がモンクメール (Mon-Khmer) 系言語族、「高地ラオ」がシノーチベット (Sino-Tibetan) 系言語族もしくはモンミエン (Hmong-Mien) 系言語族の民族にほぼ一致する。北部には、主として「中地ラオ」と「高地ラオ」が多く居住し、北部を代表する「中地ラオ」はカム (Khmu)、「高地ラオ」はモン (Hmong) とアカ (Akha) である。

表 1 に示すように、北部で最も人口比率が高いのはカムであり、またモンは北部に限らず、中部にも多く居住し、この 2 民族を対象にした農業もしくは生業構造に関する研究は多くの成果があげられている。しかし、ポンサリー県 (Phongsaly) とルアンナムター県 (Luang Namtha) において、人口比率で第 2 位の民族となっているアカの農耕や生業構造に関する調査研究は、現在のところほとんど行われていない。北部山岳地域においては、決して少数民族ではないアカの農耕と集落の生業構造を解明することは、同地域の「低地ラオ」や「中地ラオ」との比較、そして同じ「高地ラオ」の民族であるモンと比較をするためにも必要不可欠と考えられる。

そこで本研究では、村落移転という歴史的視点および空間的視点から生業構造の変化を明らかにし、更に主要経済活動である農業の特徴について、他民族との違い、および共通点に関する若干の考察を行うことを目的とした。

2. 研究対象地域の特徴

2-1. 調査村落の地理的特徴

ポンサリー県コア郡 (Muang Khoa) 内のアカの 2 村落、フエイパー村 (Houayphe) とピチュー・マイ村 (Picheu-Mai) を調査村落として選択した (図 1)。フエイパー村は郡庁所在地のムアン・コアから、国道 4 号線をウドムサイ方面へ西に約 39km 進み、更に 500m ほど山を西に登った位置に村落を構える。ムアンクアから国道 4 号線のフエイパー村の入口まで、乗り合いトラックを利用して約 2 時間から 2 時間半、国道 4 号線からフエイパー村まで徒歩で約 20 分の時間を要する。ピチュー・マイ村は、郡庁所在地のムアン・コアから、国道 4 号線を西に進み、途中で北 (ポンサリー方面) へ分岐する。ムアン・コアからは 63.5km の距離で、道路沿いに立地する。所要時間はムアンクアから乗り合いトラックで約 2 時間半から 3 時間を要する。

図 1 研究対地域

出典：ラオス地理局地形図 F-48 (1/1,000,000) を加工

この地域一帯は、中生代の造山活動によって形成された隆起山地で、フエイパー村は、国道 4 号線と平行し

表1 ラオス各県における民族構成（1995年）

地域	県	人口	主要民族 [比率(%)]	第2位民族 [比率(%)]	第3位民族 [比率(%)]	上位3民族 比率 (%)
北部	Phongsaly	152,848	Khmu (24.4)	Akha (20.0)	Singsili (19.4)	63.8
	Luang Namtha	114,741	Khmu (24.7)	Akha (23.9)	Lue (15.8)	64.4
	Oudomxay	210,207	Khmu (57.7)	Hmong (13.1)	Lue (12.2)	83.0
	Bokeo	113,612	Khmu (23.8)	Lue (20.6)	Lao (13.4)	57.8
	Luang Phabang	364,840	Khmu (45.9)	Lao (28.6)	Hmong (15.2)	89.7
	Huaphanh	244,651	Phutai (31.5)	Lao (30.0)	Hmong (20.3)	81.8
	Xayaboury	291,764	Lao (63.4)	Khmu (9.0)	Lue (8.1)	80.5
中部	Xiengkhuang	200,619	Lao (44.3)	Hmong (34.2)	Phutai (10.2)	88.7
	Xaysomboun S.R.	54,068	Hmong (53.7)	Lao (19.4)	Khmu (16.7)	89.8
	Vientiane	286,564	Lao (63.8)	Phutai (14.0)	Khmu (12.5)	90.3
	Vientiane Munic.	524,107	Lao (92.6)	Phutai (3.1)	Hmong (1.4)	97.1
	Borikhamxay	163,589	Phutai (41.0)	Lao (40.2)	Hmong (9.2)	90.4
	Khammuane	272,463	Lao (59.4)	Phutai (21.7)	Makong (13.4)	94.5
南部	Savannakhet *	671,758	Lao (57.5)	Phutai (18.9)	Katang (8.7)	85.1
	Saravane	256,231	Lao (60.0)	Katang (13.3)	Xouey (8.1)	81.4
	Sekong	64,170	Katou (24.3)	Talieng (21.8)	Halack (15.5)	61.6
	Champasack	501,387	Lao (84.8)	Lavi (4.9)	Xouey (2.4)	92.1
	Attapeu	87,229	Lao (36.9)	Lavi (17.4)	Ooy (16.4)	70.7

出典：National Statistical Centre の 1995 センサスを加工

* Savannakhet は、中部に分類される場合もある。

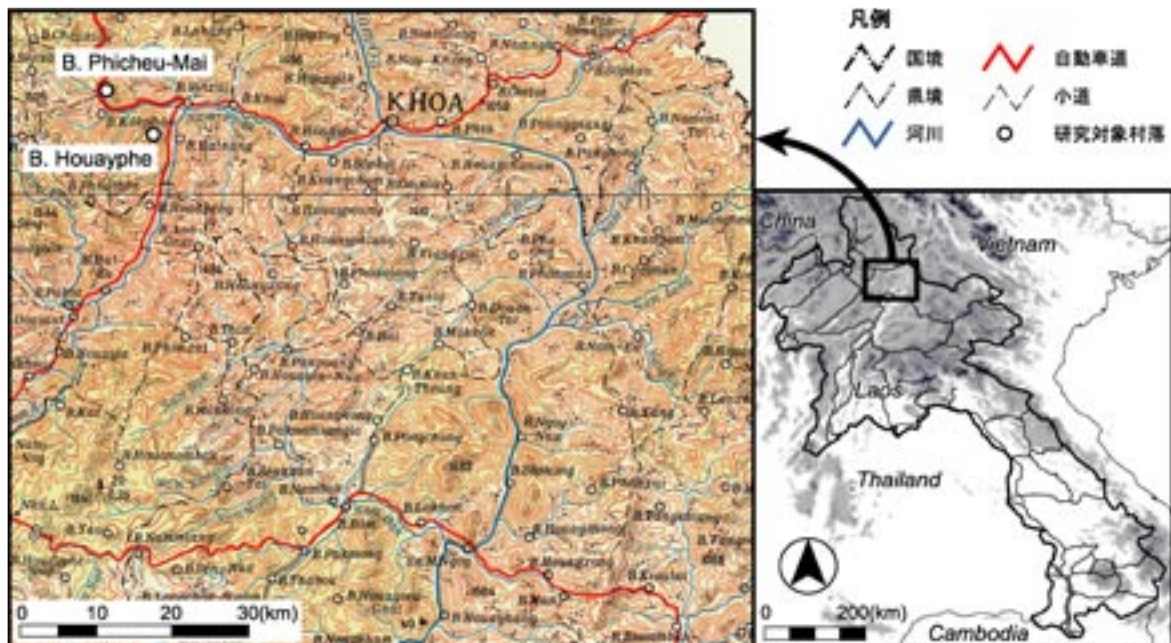


図1 研究対象地域

出典：ラオス地理局地形図 F-48 (1/1,000,000)を加工

で流れるパーク川（Nam Phak）がつくる峡谷から山頂に至る途中のわずかな平坦部に村落を構え、村落の標高は550mである。一方のピチュー・マイ村は、パーク川水系の支流であるノイ川（Nam Noy）河谷のわずかな面積の堆積段丘上に立地している。周囲は急峻な山に囲まれており、村落の標高は810mである。

2-2. 調査村落の社会経済状況

調査村落の社会経済状況を表2に示す。アカは幾つかのサブ・グループが存在し、フエイパー村はニャーウ

表2 調査村落の社会経済状況 (2003年)

地域	フエイパー村	ピチュー・マイ村
民族	アカ (ニャーウー)	アカ (プリ)
宗教	アニミズム	アニミズム
人口 (女性)	229 (103)	230 (110)
家族数	41	45
世帯数	37*	40
社会基盤	小学校(4クラス), 給水施設(集落内), 脱穀機5台, 衛星放送受信機	小学校(2クラス), 給水施設(集落近傍), 脱穀機5台, トラクター(荷車)1台
主要経済活動	焼畑陸稲作 家畜飼育(主に豚) ケシ栽培 トウモロコシ栽培 林産物採取	焼畑陸稲作 家畜飼育(主に豚と牛) ケシ栽培 トウモロコシ栽培 林産物採取 雑貨店

出典：現地調査による

* 現地で家屋を数えたところ40軒存在した。2軒が分家し、1軒がムアンクアから派遣された小学校教員の家屋である。

ピチュー・マイ村は、道路沿いに立地していることもあり、トラクターを所有していた。しかしトラクターは、耕作には全く使用されておらず、荷台が取り付けられて農作物運搬用として使用されていた。使用者は距離と荷物の重さに応じた料金を所有者に支払う。2002年は焼畑耕地入口から村まで約4kmの距離を、1パオ(米の袋の単位で、約50～60kg)1,000kipの料金を支払って使用していた。そして、フエイパー村には、村長の家に衛星放送受信機があり、タイのTV放送を見ることができる。

経済活動に関しては、米の自給を目的とした焼畑陸稲作、家畜飼育、ケシ栽培、林産物採取の4種類が両村で共通に見られた経済活動である。フエイパー村における家畜の種類は、水牛、牛、豚、ヤギ、鶏の5種類で、豚の飼育が最も盛んである。ピチュー・マイ村では牛、豚、ヤギ、鶏水の4種類が見られ、特に牛と豚の飼育が盛んである。ケシ栽培は、フエイパー村ではほとんどの世帯が実施していたのに対し、ピチュー・マイ村では、アヘン吸飲者がいる世帯だけが実施していた。そしてトウモロコシ栽培は、ピチュー・マイ村が専用の耕地を用意して栽培していた。雑貨店は、道路沿いに村落を構えるピチュー・マイ村に2店舗立地する。両村落共に、主要経済活動は農業およびそれに関連する活動である。アカの村落で重要な活動となっている農業活動に関しては4章で詳しく述べることにする。

2-3. フエイパー村の村落内部構造

フエイパー村を事例に、アカ村落の内部構造に関して説明する(図3, 写真1)。現在のフエイパー村は、2003年2月に新しく移転してつくられた集落である。

村落形態は40戸の家屋が北の広場を取り囲むように配置された「広場村」である。広場には、特に象徴的な建造物は存在せず、この空間は、全住民が集まる時の集会の場所、そして子供の遊び場として機能しているようである。集落居住部は竹製のフェンスで囲まれ、集落は4本の道と接続されている。米倉は、居住部を囲むフェンスの外に無秩序に15倉あり、複数世帯で一つの米倉を使用している。そして5台の脱穀機は、フェンスに隣接するように配置されており、すべて専用の小屋内に施錠して保管されている。脱穀機は、発電機としても使用されるため、ほとんどが所有者の家屋近くに配置されている。

ー(Nya-eu)、ピチュー・マイ村はプリ(Puli)のサブ・グループに属している。その他に、コア郡では、ロンマー(Lonma)と呼ばれるアカが存在する。

村落の規模は、両村共にほぼ等しい。しかし、社会基盤の整備状況と経済活動には若干の違いが見られた。両村共に小学校を有しており、ラオス北部の山村としては恵まれている。小学校は、コア郡で社会基盤整備の活動をしているNGO組織のラオス赤十字社による資金援助によって建設されている。ピチュー・マイ村の小学校は2002年に建築が修了し、フエイパーの小学校は、調査時に建設中であった。資金は外部からの提供であるが、労働や材料の調達には村民が行う。また、両村共に給水施設がある。脱穀機は、個人の所有であるが、1カロン(約16kg)当たり2,000kipの使用料を支払えば所有者以外も使用可能である。また、ピ



図3 フエイパー村の住居配置

出典：GPSを使用した現地調査による

フェンスの西側は急峻な谷になっており、その斜面には葉菜類の家庭菜園がつくられている。また、この集落西側の畑には商品作物であるゴマが混作されていたが、それらは全て自家消費用である。家畜はヤギと鶏を除いて、フェンス外で飼育されていた。図中で示した飼育場は、主として豚のエサ場である。牛や水牛は林間放牧され、夜間に集落近傍に戻ってくる。牛と水牛専用の牛舎などは用意されていない。

集落の北側に立地する小学校は仮校舎であり、ラオ赤十字社の資金援助によって建築が予定されている新校舎の用地は集落の南側に用意されていた。また村内 2 か所の給水施設もラオ赤十字社の援助によるものであるが、まだ仮設の状態であった。

アカの村落の特徴とも言えるブランコは、村落西側フェンス脇と集落南側の小学校建築予定地の 2 か所に設置されていた（写真 2）。ブランコは祭りの時に使用されるが、普段は子供の遊び道具となっている。また、アカの村落に一般的に見られると村内の若い男女が利用する小屋、そして、現実世界と宗教的な世界とを分け隔てる役割を果たす村のゲートは、フエイパー村では存在しなかった。アカの特徴とも考えられるこれらの建造物が存在しない理由には、集落が移転して間もないことが原因とも考えられるが、特にゲートのような宗教的な建造物は、移転後すぐに設置されるものではなかろうか。ピチュー・マイ村でもゲートは見られなかったので、移転とは関係なく、アカの村落自体に変化が見られているのかもしれない。



写真 1 フエイパー村の景観（2003 年 9 月）



写真 2 フエイパー村南側に設置されたブランコ（2003 年 9 月）

3. アカの村落移転と農外活動導入

3-1. アカの村落移転史

アカは 2000 年の移動の歴史を持ち、彼らの祖先は現在のチベット東国境付近から四川省南部と雲南省に移動してきたとされている [Schliesinger 2003: 34-35]。したがって、現在ラオスに居住するアカは、中国雲南省付近から南下してきたと考えられる。Schliesinger [2003: 35] は、ラオスにアカが移住してきたのは 19 世紀前半としているが、調査対象とした 2 村落では、正確な年代は不明であった。

聞き取り調査によって、分かる時点まで遡った村落の移住歴を図 2 に示す。フエイパー村は、現在の村落がラオス移住後 4 か所目の村落となる。現住地には、2003 年 2 月に移転し、まだ 1 年しか経過していない。前村落 H3 は、現住地から更に 30 分ほど山中に歩いたところに立地していた。住民によれば、村落 H3 は給水施設が遠く、水くみ作業が大変だったので現住地に移転したと述べていた。加えて、主要道路近傍に村落移転させることを条件に、ラオ赤十字社が小学校建設資金を提供することになったことも、移転の引き金となった。村落 H3 の位置には、約 50 年間居住していたので、ラオスに来て 2 番目の村落 H2 から村落 H3 へは 1950 年代に移転したことになる。また、ラオスに移住して最初に構えたとされる村落 H1 から村落 H2 への移転時期を知る住民は存在しなかった。なお、集落 H2 の位置は住民の説明から予想した位置であり、実際とは異なる。また、集落 H1 も、「H2 よりも更に奥地に住んでいたらしい」との説明から予想した位置である。

フエイパー村の前村落 H3 の世帯数は 2002 年時点で 57 世帯であった。現在の村落が 37 世帯であることからわかるように、移転時に 20 世帯が他村へ移住した。移住先は Lak11 村で、既存集落とは別の新しい集落を道路沿いに構えた。Lak11 村に移住した住民への調査は実施していないので、移住理由などは不明である。現在、



図 2 調査村の移転歴と周辺環境

出典：ラオス地理局の Mekong GIS データと GPS を用いた現地調査による

村落 H3 の跡地には、Lak11 村へ移住した住民が残した住居がそのまま残っており、雑草に混じって染料用の藍が生えられていた（写真 3）。

他方、ピチュー・マイ村はピチュー村から 1970 年に分村して誕生した村落である。最初のピチュー村とは、現在のピチュー・カオ村 (Picheu-Kao) P1 のことであり、旧村がピチュー・カオ村 (古いピチュー村の意味) となり、分村した村がピチュー・マイ村 (新しいピチュー村の意味) P2 となった。ピチュー村に村落を構えた時期に関しては不明である。分村のきっかけは、人口増加による土地不足である。新たな土地を探して、見つかった場所が村落 P2 である。しかし図 2 の位置は、「村落 P1 から徒歩で 1 時間ぐらい道路側に立地していた」との聞き取り情報をもとに示した位置なので、正確ではない。そして、1993 年に道路へのアクセス改善を目的として、村落 P3 の位置に移転した。しかし、移転直後から、村内で原因不明の病人が大勢発生したため、場所が悪いと判断し、1996 年に現在の村落に移転した。



写真 3 移転後のフエイパー村の旧村落跡 (2003 年 9 月)

調査対象にした 2 村落の歴史は、移転の歴史でもあり、絶えず動き続けている印象を受ける。聞き取りでは、両村落とも現村落が 4 か所目と述べていたが、事実かどうか分からない。現時点で判明している移転回数が 4 回ということである。水田耕作などの定着農業を営んでおらず、移動性の高い焼畑耕作を営んでいるため、常に新たな土地を求めてきた結果が、村落移転という形として表れているのではなかろうか。また、村落移転の過程において、両村落共に、山中から道路へ向かう方向で村落を移転させていることが特徴である。

3-2. ピチュー・マイ村における農外活動の導入

ラオスでは、道路沿いへと村落を移転させるに従い、生業構造が多角化し、そして農外活動が導入される傾向を有することが知られている [横山 2001]。道路に沿って村落を構えるピチュー・マイ村でも 2000 年に最初の雑貨店が開店し、さらに 2002 年に 2 店目の雑貨店が開店した。

最初に雑貨店経営を始めた AT 氏は、焼畑耕作を行いながら米の仲買をして貯蓄をし、1,100,000kip (約 USD110) の資金を元手に焼畑を止めて雑貨店を開始した。しかし、わずか 40 世帯の村で、村民だけを対象

表3 ピチュー・マイ村雑貨店における農林産物買い取り状況（2002年）

林産物	取扱量 (kg)	買取額 (kip)	販売額 (kip)	利益 (kip)
ゴマ (<i>Sesamum indicum</i>)	100	3,000	4,000	100,000
カルダモン (<i>Amomum villosum</i>)	50	12,000	13,000	50,000
コンニャク (<i>Amorphophallus sp.</i>)	30	3,000	3,500	15,000
ヤダケガヤ (<i>Thysanolaena maxima</i>)	1,000	2,000	2,500	500,000
カジノキ樹皮 (<i>Broussonetia papyrifera</i>)	400	2,000	2,500	200,000
ナンニャオ* (<i>Boehmeria sp.</i>)	100	3,000	3,500	50,000
合計				915,000

出典：現地調査による

* 地域によってはブアックムアックとかサーパンとも呼ばれる。カラムシ属の多年草。

に商売をしても利益が得られないため、山中に村落を構える近郊の村落全てを対象に、農林産物仲買も同時に開始した。2002年は、表3に示す6種類の農林産物を買取った。買取った農林産物は、ムアン・コアで大規模に農林産物の仲買を行っているK氏の会社に販売する。AT氏の雑貨店での農林産物取扱量は少なく、915,000kip/年（約USD91.5/年）であった。

また、AT氏は先に説明した運搬用トラクターの所有者でもある。トラクターは、2002年に中古で8,000,000kip（約USD800）で購入し、2002年は約200パオの米を運搬し約200,000kip/年（約USD20/年）の利益を得た。雑貨店に関しては、AT氏は1ヶ月に1度ウドムサイ（Oudomxay）で、約1,000,000kip（約USD100）の商品を仕入れて雑貨店で販売し、約250,000kip/月（約USD25/月）の利益を得ている。これらの利益を全て合計すると約4115000kip/年（約USD411.5/年）になる。AT氏は、山村部としては高い収入を得ているといえる。

ピチュー・マイ村で2番目に雑貨店経営を始めたAS氏は、農林産物買い取りなどは行っていない。AS氏の雑貨店収入は約120,000kip/月（約USD12/月）である。雑貨店を開始した2002年は、焼畑耕作を止めて雑貨店経営に専念したが、雑貨店だけでは貯蓄ができないため、2003年度は、0.5haだけ焼畑耕作を再開した。しかし、雑貨店経営との兼業では、農業に多くの時間を割くことができないため、のべ20人/年を焼畑耕作のために雇った。AS氏の商品仕入れ額は、約400,000～500,000kip（約USD40～50）であり、商品種類も量もAT氏と比べると少ない。AS氏は、雑貨店経営を始めて1年経過したところであり、現在は焼畑耕作との兼業であるが、将来的には資金を蓄積し、農外活動専業で生活したいと考えている。

ピチュー・マイ村では村落が山中に立地していた時代は、全世帯が農業に従事していたが、村落が道路沿いに移転したことを契機に、農外活動を導入する世帯が現れた。当初は、小規模な米の仲介などで資本を蓄積し、その後、雑貨店経営や多種の農林産物仲買などの農外活動を導入するプロセスが明らかになった。

4. アカの村落の農耕

4-1. フェイパー村の農地

フェイパー村の農地は、大別して4種類に分けられる。主食である米を作付けする焼畑耕地、ケシとトウモロコシ栽培用の焼畑耕地、キャッサバ用の耕地、そして第2章で説明した家庭菜園である。トウモロコシとキャッサバは主として豚の飼料として栽培しているが、米が不足する年には食用することもある。フェイパー村で栽培されている陸稲は、ウルチの晩生種で、アカ語で「グーナ」、「グース」と呼ばれる伝統品種である。モチも小面積だが作付けられており、晩生種が「ニョー・ピア」、早生種が「ニョー・オー」と呼ばれる伝統品種である。ウルチ種の収量は、平均して1.25t/haとかなり高い。トウモロコシは、近年ラオス北部で見られるようになったハイブリッド種ではなく、サリー・メオ（アカ語で「メズ・アドウ」）と呼ばれる、粒が紫色の芯が短い伝統品種である。キャッサバは、ベトナム品種を約30年前から栽培している。

フェイパー村の農業の特徴は、ケシとトウモロコシが同じ耕地で、しかもケシが焼畑農法によって栽培されることである（表4）。その栽培方法は、8月にトウモロコシを収穫した後、9月に火入れをして、すぐケシ栽培

表4 フェイペー村焼畑耕地の作物栽培歴

月 作物	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
陸稲		伐採	伐採 乾燥	火入れ	播種	除草	除草	除草	除草	収穫	脱穀	
ケシ	除草	除草	収穫						整地	播種	除草	除草
トウモロコシ			播種	除草	除草	除草	除草	収穫	火入れ			

出典：現地調査による

のために鍬で耕地を整地する。そして10月にケシを播種し、3月にケシを収穫した後、ケシの跡地にトウモロコシを播種する。収穫後のケシは自然に枯れるので、そのまま放置するという耕作システムである。なお、表4にはケシの除草期間を11月から2月と記したが、実際には、1月に1回目の除草、2月に2回目の除草を実施するだけの粗放的栽培である。ケシの収量は、約10pong/ha（約3.75kg/ha）である。

アカと同じくケシを栽培しているモンは、ケシだけを5～10年栽培し、その後何十年も放棄する半常畑形式で栽培している。フェイペー村の場合、トウモロコシと組み合わせることによって、耕地開墾の省力化を図っていると考えられる。しかし、使用できる期間は3年と短い。1世帯あたり3か所の耕地を所有しており、3年3か所の9年ローテーションでケシとトウモロコシを栽培している。ケシとトウモロコシ用の焼畑耕地は、聞き取りによれば「黒くて柔らかい土で、石混じりの冷たい土地」が栽培に適していると述べていた。

一方、陸稲は標準的な方法で栽培されている。化学肥料などは使用していないが、2000年から除草剤は使用している。除草剤は、播種して1ヶ月後の6月に1度だけ散布する。除草剤を使用することで、その後の除草作業が楽になるのが、使用の理由である。除草剤はウドムサイから購入している。陸稲用焼畑耕地は、1年耕作して平均7～8年間休閑するサイクルで維持されているが、耕地選択の基準は、休閑年数ではなく森林植生の状態で決定される。アカは森林の状態を示す言葉を持っており、稲を刈り取った直後の状態を「ヤープウー」、まだ十分に回復しきっていない2次林を「イエサー・サーバー」、森林がある程度回復して樹高の高い樹木が生い茂るようになった2次林を「サーカー」、そして完全に森に戻った状態を「サカカマー」と呼ぶ。焼畑耕地として使用するのには、「サーカー」の森林植生になってからであり、「サーカー」になるまでには約7～8年の年数を要する。しかし、調査をした2003年に焼畑を実施した耕地は、休閑期間4年間の「イエサー・サーバー」であった（写真4）。「イエサー・サーバー」を伐採した理由は、4年目にしては森林植生の育ちが良く、良い土壌なので、伐採しても問題ないと判断したからである。「イエサー・サーバー」の森林を伐採することはめったにないが、植生の育ち方を見て、適すると判断したら、休閑年数はほとんど関係なく使用される。なお、焼畑とは無関係であるが、アカの言葉では、「ローピュー」と呼ばれる「聖なる森」という森林区分も存在し、伐採は禁止されている。「ローピュー」は埋葬林としても使用されている。



写真4 フェイペー村の陸稲用焼畑耕地（2003年9月）

4-2. アカ村落における農林産物の流通

調査対象としたアカの村落で栽培されている農作物は、ケシを除いて、全てが自給用である。しかし、米に関しては、余剰米が出た年に限り、村内もしくは近郊の村落で販売する。ケシから採取されるアヘンは、「低地ラオ」が買い取りに来る。村民によれば、販売したアヘンはタイとミャンマー国境付近で販売されているとのことであった。しかし、真偽のほどは不明である。「低地ラオ」が、アヘンを買い取りに来るようになったのは、第二次世界大戦以降である。戦前は、雲南省からホー（Ho）が馬でキャラバンを組んでアヘンの買い取りに来ていたが、戦後は中国-ラオス国境の通過が困難になり、ホーはラオスに入国しづらくなった。ホーとアカのアヘン売買に

は、仏領時代に使用された銀貨（マン）が用いられ、1pong（375g）が20マンと交換された。現在、マンはお金として使用することはできない。しかし、アカの女性が身につける衣装にも装飾品として使用されており、結納ではマンが男性の家族から女性の家族に納められる。アカにとっては財産として現在でも価値あるものとされている。

林産物に関する売買は、ピチュー・マイ村とフエイパー村では異なっていた。ピチュー・マイ村では、前述の雑貨店経営者が林産物仲買を兼ねているので、採取者は林産物を村内で換金していた。一方のフエイパー村には、仲買人が存在しないため、林産物は定期市の時にムアンクアの林産物仲買業者に販売していた。フエイパー村民が出かける定期市は、シンサイ村（Sinxai）のパークナム（Paknam：シンサイ村から西に約1kmの位置にある主要道路の三叉路）とラートサン村（Latxang）で開催される定期市である（図2参照）。パークナム定期市は、「中地ラオ」の歴で第4の日（カム語でKat）、そしてラートサン定期市は、第5の日（カム語でKot）に開催される。

4-3. アカの農作業と土地所有

ラオスでは、「ヌアイ」とよばれる村内で任意に形成される数家族から成る小集団で農作業を実施することが多く、ほとんどのラオヤカムは、「ヌアイ」を形成している。しかし、アカは「ヌアイ」を形成せず、家族単位で農作業を行う。まれに親戚同士で無償の労働交換をすることもあるが、ピチュー・マイ村での聞き取りでは、親戚同士でさえ金銭労働が一般的であった。その労働対価は、金銭の場合、除草作業が5～6,000kip/日、収穫と村への運搬作業が7～8,000kip/日である。金銭以外にも、米で支給されることもあり、1,000kipが粃米1kgで換算される。

相場であった。

その他に、他民族と異なる点は、農地が世襲によって家族単位で所有していることである。他民族の場合、家族や「ヌアイ」の労働力に応じた面積を毎年新しく分配するのが一般的である。焼畑耕地は年によって場所も耕地面積も変化するため、世帯ごとに決まった土地で作業することは難しい。しかし、既に何世代にもわたり、この世襲による土地所有がアカの村落では続けられてきた。親が使用した土地を子に分配するため、子供の世代になると、耕地が細分化し1家族あたりの耕地面積が減少する。また、土地の境界をめぐるトラブルも毎年発生すると言う。何年も前に耕作した焼畑耕地の境界を正確に覚えていること自体が困難であり、トラブルは当然の結果と思われる。

ピチュー・マイ村がピチュー村から分村した要因は、人口増加による土地不足であったが、土地不足はこの土地所有システムに起因するのではないかと考えられる。加えて、フエイパー村でも、現在の村落に移転する際に20世帯がLak11村へ移住したが、その背景には土地不足の問題があったのではなかろうか。焼畑を主要な経済活動としているにもかかわらず、アカの村落でこのような土地所有を続けている理由は不明である。

5. むすびにかえて

本稿では、ポンサリー県ムアンクア郡に立地する2つのアカ村落を事例に、彼らの生業構造と農耕の特徴について述べてきた。

アカは絶えず村落を移転し続けており、特に道路沿いに村落を移転させたピチュー・マイ村では、農業活動だけの生業構造から農外活動が導入されるという生業構造の変化が見られた。本稿で事例として説明したAS氏は、農業活動をしている一般村民から、農外活動を導入し始め、農業活動との兼業によって生活している生業変化の第一段階と捉えることができる。そしてAT氏は、第一段階を経て資本の蓄積が進み、農外活動だけで生活できるようになった第二段階に達している。ウドムサイでわずかな面積の水田を所有する道路沿いのラオの村落では、多くの村民が農外活動を導入する一方で、水田を購入して農業活動に特化する世帯も存在し、村内が二極化するような傾向が見られた〔横山2001〕。しかし、水田を所有しない道路沿いに移転したアカの村落では、どのような生業構造の変化が生ずるのか未だ研究成果は無い。

村落の移転は、生業構造変化以外にも影響を与えており、調査対象の2村落ともに、現在の位置に移転してから、一般的にアカの村落に見られる村の入口のゲートが見られなくなった。宗教的な意味合いの強い建造物が移転後に見られなくなるという現象は何を意味しているのだろうか。これまでは、山中に村落を立地していたため、

閉鎖的な環境で生活してきたが、村落が道路沿いへと移転するにつれて、様々な情報や新たな技術、そしてこれまでとは異なった価値観が入り込むようになった。そうした多種多様な情報がアカの村に自然に入ってきたことによって、彼らも気が付かない価値観の変化がもたらされ、宗教的な意味合いの強い建造物が消失するという現象に結びついたのかもしれない。

また、フエイペー村では、ラオス赤十字社の資金提供によって建築された小学校で、ラオス語教育を夜間の19:30～21:30に実施している。なお、教師費用50,000kip/月はラオス赤十字社が支払っている。2003年9月時点で、15歳から45歳の27人がラオス語を学んでいた。村落が山中に立地していた時代には、学校もなく、ラオス語を使用する機会も限られていたが、村落が道路近傍に移転したことにより、ラオス語の必要性が高まった。ラオス語教育は少数民族が多いラオスにおいて、国民国家を形成するために必要とされ、政府が力を入れている政策の1つであるが、フエイペー村のような辺境部のアカも、こうした変化を受け入れようと努力している。村落移転によって、アカの生活様式が徐々に「低地ラオ化」していると考えられるのではなかろうか。

しかし、彼らの農耕を見ると、未だに彼ら独自の農作業形態と土地所有が残されていた。それは、他民族よりも家族が重要な単位となっていることに起因している。農作業の単位も家族で、焼畑耕地も含めた土地所有も世襲、すなわち家族である。特に土地所有に関しては、家族を単位している理由は理解できない。極端な考え方をすれば、土地面積が少なくなって、耕作できなくなった家族は他村に移転することを前提に、村内の人口を適切に保ち焼畑耕作の持続性を維持しようとする方策なのかもしれない。もしくは、この土地所有システムが何世紀にもわたって続けられてきたのであれば、ラオスに来たアカは、前住地の雲南省では、焼畑ではなく水田などの定着農業を営んでいた可能性がある。定着農業ならば、土地の所有権を家族に付与して当然である。しかし、中国に居住しているアカ（中国ではハニ）の土地所有システムについては不明であり、この論は推測の域を出ない。

村落の移動という空間的な視点からアカの村落を調査したが、彼らの生業構造と農耕がある程度明らかになったと同時に、様々な疑問も生じた。機会を見つけて、再調査の必要性を感じている。今後も、空間的な視点から、村落（＝人）、モノ、情報の移動を中心にラオス北部山岳地域の農耕と生業構造を歴史的に遡って明らかにする研究を継続していきたい。

文献

Chazée, Laurent 1999 *The People of Laos: Rural and Ethnic Diversities*. Bangkok: White Lotus.

Schliesinger, Jachim 2003 *Ethnic Groups of Laos: Volume 4. Sino-Tibetan Speaking Peoples*. Bangkok: White Lotus.

横山 智 2001「農外活動の導入に伴うラオス山村の生業構造変化－ウドムサイ県ポンサワン村を事例として－」『人文地理』53(4):1－20.